

# 十和田古道の発見と霊山十和田 齊藤利男 (弘前大学名誉教授)

※菅江真澄「十曲湖」挿絵は秋田県立博物館デジタルアーカイブ (2018年)、「新撰陸奥国誌」はみちのく双書を利用



冬の十和田湖、中湖の朝。神秘の青い水を湛える中湖は、東に聳える御倉山とともに十和田湖のカミ青龍大権現が住む神域とされていた。

かつて十和田湖は、千古不伐の大森林が広がる高山の頂上に、神秘の青い湖水をたたえた世界であり、十和田湖のカミ十和田青龍大権現を祀る神仏習合の霊山、世界遺産に登録されている熊野や日光にも比すべき、北東北最大の山岳霊場でした。そしてまた、奥入瀬溪谷や八甲田山も含めて、僧侶や修験者の山岳修行の場であり、民衆の信仰登山、聖地巡礼の山でもありました

現在は、かつて高名な霊場であったことは忘れられ、自然景観にすぐれた景勝地としてのみ紹介されることの多い十和田湖・奥入瀬ですが、この霊山十和田のかつての姿（原風景）と、そこに至る参詣道「十和田古道」について、紹介したいと思います。

## 十和田御堂と占場

現在の十和田湖で霊場時代の雰囲気を与えるのが、近年パワースポットとして人気を集めている十和田神社です。十和田神社



現在の十和田神社拝殿 (1941年建立) 日本武尊を祀る。

は、中世は「額田嶽熊野山十彎寺」(この名は十和田湖が熊野系の勢力により開山され、熊野をモデルとしたことを物語っています)、近世には「赤倉峯十和田山青龍大権現」と称した神仏習合の寺院で、十和田のカミ十和田青龍大権現(人間だったときは南祖坊)を祀り、現在の拝殿の場所には本尊聖観音を本地仏として安置する方四間の仏堂「十和田御堂」が建っていました。

また十和田神社の右奥、岩山を登った先の台地（現在の神泉苑）は、南祖坊が入定し青龍大権現となったと伝える中湖と「カミ」の宿御倉半島（旧名御倉山）の「御室（奥の院）」をのぞむ神聖な場所であり、台地を降りた中湖の水際には、参詣者が占いと祈り（散供打ち）を行った「占場(オサゴ場)」が、今も昔のまま存在しています（写真①）。



占場の風景、東日本大震災以来、陸からは通行止めとなっている。

### 「御山（おやま）」と三重の結界

しかし「霊山十和田」を構成したのは、それだけではありません。実は、青い湖水をたたえた十和田湖自体が、十和田青龍大権現のすむ聖域であり、湖を取り囲む十和田火山外輪山の内側は、本来、カミの住む世界＝神域として、平安時代末期の開山以前は、女人禁制の世界だったみられるからです（開山以後、女人禁制は解かれ、「仏の山」としてすべての人々に開かれました。これはモデルとなった熊野の場合と同じです）。人々は湖とそれを取り囲む山全体を「十和田山」と名づけ、「カミのすむ山」の意味で「御山」と呼びました。



月日山にある日月神社(もとの月日山観音堂)

十和田外輪山の山麓にある参詣道の登り口は、「御山に入る」入口、十和田山第一の関門とされ、自然の川・滝やそこに立つ鳥居・神社が、聖域と俗界を分ける第一の結界となっていました。東の五戸口五戸道の月日山（写真②）や、修験者が奥入瀬溪谷に入る淵沢の石合砥（写真③）、西の鹿角口藤原道の七滝（写真④）がそれで、現在でも往時の面影を色濃く留めています。



石合砥（下の禊ぎ場）奥入瀬では珍しく絶壁の間を川が流れる。

そして、参詣者が長い山腹の道を登りきって外輪山頂上の峠（東は鳥居長根、西は発荷峠・鉛山峠）に立ったとき、視界が開け、五戸道・七戸道の鳥居長根（惣辺牧野を見下ろす尾根）では、正面に雪をいただく八甲田山と、巨大な十和田カルデラ・御鼻部山、そして奥入瀬川の深い谷がひろがる、すばらしい光景があらわれます（次頁写真⑥）。また、西の白沢道の発荷峠（写真⑤）や藤原道の鉛山峠でも、眼下に十和田湖の青い湖水が広がる絶景を目にしました。



⑤

⑥

十和田カルデラ

奥入瀬溪谷の谷

八甲田連山



⑧

かつての遙拝所に近い惣辺牧場広場展望台からの景観 (2020. 5. 24)

そこが神域を望む**第二の結界**であり、**大華表**が立ち、十和田山・十和田湖を拝する**遙拝所**が置かれていました。また峠を下った湖畔には、最初の散供打ち場「**占場**」が設けられていました。東の**松倉ヶ鼻** (写真⑦)、西の**鹿角発荷** (現在生出キャンプ場があるところ)がその場所です。とくに松倉ヶ鼻は、かつての霊場としての景観が手つかずで残っている、すばらしい場所です。



⑦

人々はさらに湖岸の長い道をたどり、當時は**桂平**といった現在の**休屋**に到達します(「休屋」の地名は、ここに参詣者のための**宿泊小屋**「**休屋**」が立ち並んでいたことに由来します。写真⑧、菅江真澄『十曲湖』より休屋の風景)。ここを流れる「**解除川**(はらい川)」(現在の神田川、写真⑨)が霊山十和田の中心部に入る最後の境界、**第三の結界**でした。人々はこちらで



⑨

みそぎを行い、身体を清めたあと、**林立する鳥居**と巨大な**杉並木の参道** (写真⑩) を通って、「御山」の中心**十和田御堂**とその奥の**占場**に至ったのです。占場からは中世以来の信仰を物語る大量の**中国渡来銭**(唐銭・宋銭・明銭)や**寛永通宝**、**銅鏡**が発見されています。



⑧

ちなみに、山麓にある「御山」の入口、聖域十和田山・十和田湖を望む**外輪山の峠**、御堂の入口**解除川**(はらい川)という**三重の結界**もまた、熊野とそっくりです。



⑩

## 伝説の開山上人「南祖坊」

十和田湖が霊山として開山されたのは、平安時代の末期、平泉の奥州藤原氏の時代とみられています。開山の拠点となったのが五戸七崎の永福寺で（写真⑪⑫）八戸市上永福寺の七崎神社・普賢院一帯の地にあり、清衡時代の創建と推測される。現在盛岡にある永福寺や普賢院は、真言宗寺院だが、創建時、永福寺は平泉中尊寺と同じ天台宗で、現在の七崎神社の場所に本堂以下の伽藍が、普賢院の場所に別當の住む本坊があり、周囲に子院＝塔頭が立ち並んでいた）、その僧侶と伝える南祖坊が伝説の開山上人でした。

物語では南祖坊は聖観音菩薩の生まれ替わりとされています。現在の南部町斗賀で生まれ、幼名を額部丸といました。幼くして永福寺に入り、僧となって修行したあと、都にのぼり、比叡山や播磨の書写山、熊野山で修行を重ねました。そして熊野権現のお告げを受けて故郷に戻り、十和田山（十和田湖）にのぼります。この話は十和田湖を開山した宗教者が天台宗で熊野系の修験者だったことを物語っています。十和田神社のそばに熊野社の祠があるのも、そのためです。

十和田湖では、湖の主である女神の龍（龍女）が、奴可の嶽（八甲田山）の池に住む八つの頭の大蛇のストーカーにあって苦しんでいました。龍女に助けを求められた南祖坊は、法華経の力で九つの頭の大蛇に変身し、姿を現した八頭の大蛇と、七日七夜、湖の上で激闘を展開します。激しい闘いの末、大蛇を追い払った南祖坊は、十和田湖を、仏の功德が行き渡る平和で穏やかな「仏の湖」に変え、十和田湖の龍女と夫婦になって、自らも青龍大権現となり、湖の主となったとされています（写真⑬⑭⑮）。

実はこの物語こそ本来の十和田縁起で、室町時代の初め、都に近い近江国でつくられた『三国伝記』に記されています。そこには現在、十和田湖伝説として広く語られている「八郎太郎の物語」（写真⑯）仲間のイワナを食べた罰で大蛇に変身した鹿角郡草木村の若者八郎太郎が、奥入瀬川をせき止め十和田湖をつくったが、その後この地にやって



明治初年の七崎神社（新撰陸奥国誌より）中世の永福寺の地



現在の七崎神社境内、伽藍は失われたが、樹齢千年という神木がそびえ、聖域の雰囲気を与える。

御倉半島の五色岩（旧名「色ある山」）。八郎太郎と南祖坊の戦いで流された血で赤く染まったという。



（左）十和田神社拝殿の側に建つ熊野社の祠。

（右）十和田神社奥の神泉苑にある元宮（右）と南祖殿。

南祖坊＝十和田青龍大権現を祀る。背後は中湖。



紙芝居「十和田湖伝説」より、八郎太郎と戦う南祖坊（龍に変身していない）

きた南祖坊によって、十和田湖を奪われ、南祖坊が十和田湖の新たな主となった)も、八郎太郎と田沢湖の辰子姫の仲を、辰子姫に横恋慕した南祖坊が妨げたが、辰子姫が断固南祖坊を拒絶して、二人は目出たく恋を成就させたという「三湖伝説」もありません。現在語られている「十和田湖伝説」では、どう見ても南祖坊は悪者で、なぜこの悪者が十和田のカミとして信仰されているのか理解に苦しみますが、本来の話は全く違うものだったのです。

これまでの研究で、現在の「八郎太郎の物語」は、鹿角地方で語られていた伝説をもとに、大正から昭和の初期、中央の物語作家によって近代的な解釈が加えられ「日本昔話」として創作されたものとみられており、「三湖伝説」に至っては、戦後の観光ブームの中、八郎湯・田沢湖のある秋田県でつくられたものであることが判明しています。

### 聖地巡礼の旅と修験の行場

つまり、十和田湖の本来の伝説では、十和田湖のカミは八郎太郎ではなく、もとの湖の主である龍女と、この龍女と夫婦となった南祖坊＝十和田青龍大権現だったのです。そして、この十和田の「カミ」青龍大権現と、本地仏(南祖坊が人間になる前の姿であった仏)聖観音のご利益を得るために、人々は十和田湖までの長い道を歩き、多くの山や峠を越えて「難行苦行」の功德を積み、霊山十和田への参詣を行ったのでした(写真⑰⑱)。

実は、近代以前、人々を引きつけた「聖地巡礼の旅」とは、この「難行苦行」の功德を積むところに本質があり、それによってこそ仏やカミの救済を得られると考えられていました。そして、そうした条件を満たす「勝地」(すぐれた自然景観をもつ宗教的な場所)が霊山・聖地の条件でした。世界遺産で有名な十和田湖のモデル熊野(写真⑲⑳㉑㉒)

(右) 往時の姿を再現した十和田参詣の旅(2021.5.15)、五戸道月日山古道にて



⑰ 発荷峠からみた雲海の十和田湖。龍神の住む湖という伝説にふさわしい。



⑲ 熊野古道の終点、本宮大斎原(熊野本宮旧社地)



⑳ 熊野川の中州にある本宮旧社地「大斎原」全景

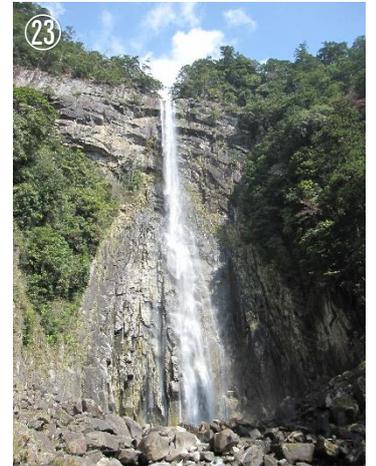


(上) 熊野古道 ㉑㉒水呑王子から伏拝王子へ



や日光、スペインのサンティアゴ・デ・コンポステーラなどがその代表です。

熊野・日光や十和田湖は、もう一つの宗教的要素をもっていました。それは俗界を離れた清浄な地、自然の靈力に満ちた奥深い山岳・湖水であったことです。そこは修験道の全盛期だった古代・中世には、仏教者や修験者が修行を重ね、自然の靈力を感得して呪術的能力を身につける山岳修行の場として、絶好の場所でした。日光・熊野はもちろん十和田湖でも修行の「行場」（滝・洞窟・岩場）が各所にありました。現在の十和田神社一帯、中山半島、滝と岩場が連続する奥入瀬溪谷、壮大な山岳である八甲田山が、そうした場所だったと考えられています。とくに奥入瀬溪谷の銚子大滝から馬門岩（かつての地名は駒止、写真②⑦）までの間は、俗人の立ち入りが禁じられ



修験の「行場」の跡

②③熊野三山、那智の大滝（一の滝）

②④奥入瀬溪谷、石合砥（上の禊ぎ場）

②⑤銚子大滝、②⑥休屋御前ヶ浜にある修験窟（現開運の小道）



た聖域だったとみられ（熊野の那智滝の奥も同様の場所）、現在の奥入瀬観光の中心「銚子大滝」（もとの名は「銚子の口の大滝」または「御滝」＝神の滝、「銚子の口」は子ノ口の旧名）は、修験者の滝行の場所でした。かつて滝の側には不動明王像が立てられていたことが、記録に残っています。

### 五つの参詣道、中世・近世の堀道と「十和田山新道」の発見

霊山十和田が最も栄えた江戸時代、十和田湖に至る主要な参詣道には、五つの道がありました

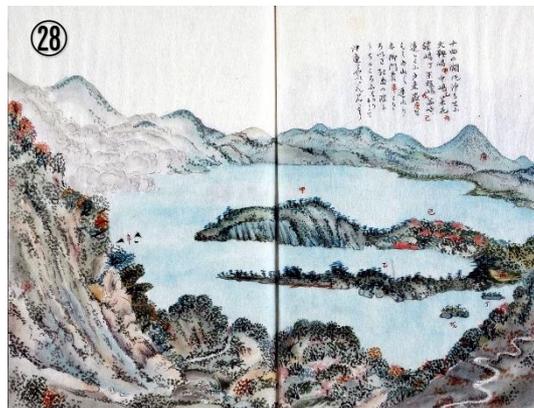
(前頁地図)。東の三戸郡・上北郡(近世は北郡)から①五戸道(中世以来の参詣道本道、七崎永福寺から、月日山をへて、惣辺牧野で七戸道と合流、子ノ口で十和田湖に出て十和田御堂に向かう)、②七戸道(奥瀬から)、③三戸道(南路ともいう、貝守から直ルートで十和田湖へ)、西の鹿角郡からは④白沢道(毛馬内から発荷峠をへて十和田湖へ)、⑤藤原道(毛馬内から七滝・鉛山峠をへて、発荷峠下の鹿角発荷で白沢道と合流)です。十和田湖を訪れた菅江真澄、松浦武四郎の紀行文(写真②⑧)、江戸時代に八戸で記された参詣案内記、明治初年に書かれた『新撰陸奥国誌』等の文献から明らかになるものです。

盛岡藩は靈山十和田と十和田信仰の拠点永福寺を厚く保護しました。永福寺は盛岡開府に伴って盛岡に移され、盛岡五山の筆頭とされます。とくに二代藩主南部利直の十和田信仰は厚く、自らを南祖坊の生まれ変わりと呼び、永福寺には「十和田の御間」が設けられました。毎年五月十五日の十和田御堂の例祭には、五戸代官が藩主の代参を行いましたし、盛岡藩庁からは、藩主の祈願のためしばしば代参の使者が派遣されています。

子ノ口の十和田湖畔には「元禄の十和田山新道碑」と呼ばれる元禄6年(1693)に建てられた記念碑があり(写真②⑨)、十和田別当折田左馬丞の申請を受けた盛岡藩主南部重信の命により、五戸通代官木村又助秀晴が「十和田山新道」の普請を行ったことが記されています。2009年には小笠原力オル・東正士氏の共著『古道を歩く』(文化出版)が刊行され、中世以来の本道五戸道には、御神燈(写真③⑩)石仏・古寺社などの信仰の遺跡が残されていることが紹介されました。

しかし、そうした知見にもかかわらず、これらの参詣道自体を対象とした学術調査が行われることはなく、熊野古道に対比される「十和田古道」の実像は、長らく不明のままでした。また、子ノ口の「元禄の十和田山新道碑」に記された「新道」が何をさすのかも、明らかではありませんでした。

2019年11月、五戸道の入口、月日山一帯を対象に、十和田歴史文化研究会と十和田湖



菅江真澄『十曲湖』の挿絵に描かれた鉛山峠から見た十和田湖



子ノ口十和田湖畔の国道そばに立つ十和田山新道の碑と解説版



月日長根の月日山と惣辺の中間にある天保6年(1835)の御神燈

伝説の会の主催による第1回の十和田古道学術調査が行われ、これまで古道だと思っていた林道のそばに、江戸時代の大規模な「堀道」が、良好な状態で残っていることが発見されました(写真③⑪)。



第1回十和田古道学術調査風景。月日山にて。

③は古道の大きさを測定しているところ。

そして、その後の15回を超える調査で、この古道は、月日山の入口から中間地点の惣辺牧野までの間の約7割の区間で残存していることや、中世の道とみられる規模の小さい堀道があることもわかり、元禄年間の「十和田山新道」普請とは、従来の参詣道の大改修して、歩きやすい新道をつくる工事であったことが明らかになったのです。堀道の規模は、大きなところで、幅1m、深さ3m、堀の上約7mに及ぶものでした(写真③③④)。

その後、今年になってからの調査で、「新道」工事は七戸道でも行われ、随所に大規模な堀道が残っていることが、明らかになりました(写真③⑤)。また、盛岡藩家老日誌『盛岡藩雑書』の分析から、十和田山新道の普請開始は、貞享3年(1686)と見られること、その後、盛岡藩の財政破綻発覚(1689年)や、藩主重信の隠居により、元禄5年(1692)、6年で工事は打ち切られたことなどが、判明しました。この推測を裏付けるように、五戸道でも七戸道でも「新道普請」は途中(五戸道は鳥居長根、七戸道は馬ノ神の東山腹)で終わっていました。

### よみがえる「十和田古道」の世界

それだけではありません。この間の調査で明らかになった「十和田古道」の世界からは、興味深い事実が次々に発見されています。

まず五戸道では、村里を遠く離れた月日長根(月日山と惣辺の間の尾根)の山中に、戦国時代末期の堅固な城館跡や、見張所跡が見つかり(写真③⑥)、この古道が中世以来の道であることが確認されました。古道と中世城館のセット関係は七戸道でも確認されています(起点奥瀬館と山中の戦国期城館)。

次に、休屋でかつて五戸道と七戸道の追分にあったとみられる「右ハ山ミち、左ハ法量道、ゆみち」と刻んだ追分石が見つかりました。これは遺物として貴重なだけでなく、十和田参詣が「ゆみち」つまり温泉入浴とセットになっていたことを物語るもので、熊野参詣で、本宮参詣と湯の峰温泉入浴がセットになっていたことを思いおこさせる、興味深い発見でした(写真③⑦③⑧)。



月日山の中腹で見つかった大規模な堀道。



③④は尾根上を通る現代の林道の南側直下に掘られており、北風を避ける配慮がされていたことがわかる。



七戸道で発見された堀道、発見された堀道の遺構中、最大の規模を誇る。



月日長根で見つかった戦国城館の遺構



③⑦は休屋で発見された追分石、もとは惣辺牧野の五戸道と七戸道の分岐点にあった。

③⑧は現在の湯の峰温泉の風景。熊野古道ブームで、いまでも活況を呈している。

それらの中で最も重要な発見は、「鳥居長根」＝現在の惣辺牧野を見下ろす尾根の上に、五戸道をまたいで大華表が立てられ、八甲田・十和田山（湖面は見えないが、御鼻部山と巨大な十和田カルデラが眺められる）・奥入瀬渓谷の谷を一望する遙拝所が設けられていたことが、わかったことです。この大華表のことは、松浦武四郎の紀行文『鹿角日誌』に記されています。そこは、本道五戸道が、霊山十和田の聖域中心部に入る**第二の結界の場所**で、参詣者はこの地点で、月日長根の樹林帯の中の道を出て、大華表をくぐり、初めて「霊山十和田」の全貌を眺望する大景観を目にしたのでした。

実は熊野古道の本道「中辺路」にも同じような場所がありました。「(熊野の)御山に入る」第一の結界滝尻王子から、重畳たる山並みをこえ、音無川の谷から急坂を上って本宮大社に続く盆地の入口に立った「**発心門王子**」がその場所です(③⑨地図、写真④⑩)。

そこは熊野本宮に至る第二の結界、本宮に続く聖域中心部の入口であり、古道をまたぐ大華表が立ち、参詣者は裸ぎ襦いをして華表をくぐりました。「発心門」という名はそれに由来します。そしてこの発心門をすぎ、しばらく行くと、はるかに熊野川の流れと本宮旧社地大斎原をのぞむ伏拝王子に達します。

鳥居長根の大鳥居・遙拝所は、まさにこの熊野の発心門王子を彷彿とさせる場所です。そこは「日本にもこのような場所があったのか」と思わせる、すばらしい景観の場所で、十和田御堂の正式の名が、中世には「額田嶽熊野山十彎寺」、近世は「赤倉峯十和田山青龍大権現」と、八甲田山と十和田湖がセットになっていることの意味も、よく理解で



熊野古道「中辺路」と3つの結界



現在の発心門王子、かつての大華表の代わりに小さな鳥居が立つ。



惣辺牧場広場展望台と背後の八甲田連山

きるところなのです(額田嶽とは八甲田岳＝八甲田のことで、赤倉峯は南八甲田の乗鞍岳・赤倉岳をさす)。

残念ながら、この大華表と遙拝所跡は現在牧場になっていて、許可なく立ち入ることはできません。しかし幸いにも、この遙拝所近くにある惣辺牧場広場展望台(写真④①)からの風景(写真④②)を通じ、かつての参詣者の感動を体験することができるのです。



惣辺牧場広場展望台からの大景観、左端は十和田山、この左に戸来岳があり、右には八甲田から東に続く山並みが一望される。



風力発電機の風車建設で、惣辺牧野の景観はこのように大きく変貌します。

### 「霊山十和田」の景観が消滅する

しかしいま、このすばらしい自然景観かつ「霊山十和田・十和田古道」のカナメとなる文化遺産であり、近い将来の十和田湖の歴史文化観光にとっても最大の目玉になるであろう風景が、消滅の危機に直面しています（1936年、富士箱根・吉野熊野・大山とともに国立公園に指定された十和田湖は、現在深刻な衰退に直面しており、歴史文化観光をテコに再生をめざす努力が、地元十和田湖畔の人たちによって始まっています）。2025年6月工事着工、2029年7月営業運転開始をめざして着々と計画が進められている、国内最大級の惣辺奥瀬風力発電所計画がそれです。

ちなみに、発電機が立つ場所は、**十和田市営惣辺牧場**を中心とした地域で、これによって十和田市には**多額の固定資産税収入**が見込めるほか（十和田市議の質問に対する市当局の回答）、地元の土建業者は、建設に伴う巨額の土工事発注でうらやまを期待しているようです。

しかし、国立公園十和田湖・奥入瀬・八甲田地区のすぐとなりの場所に、高さ約180mという巨大な風車が43基も林立する上に、風車設置予定地は、奥入瀬溪谷を真下にのぞむ尾根筋にあり、風車建設に伴う大規模な切

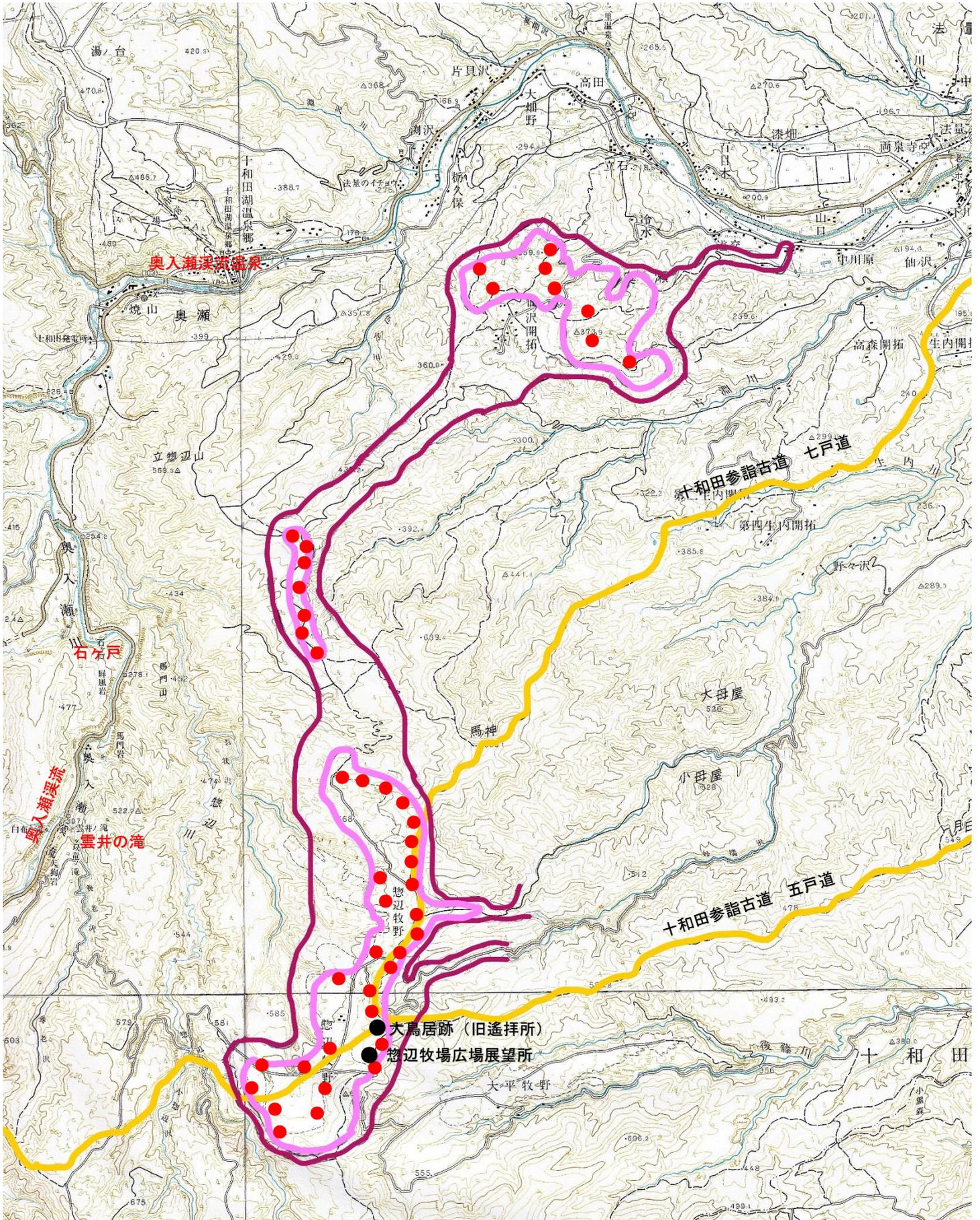
り土・盛り土工事が、不可欠となります。この展望台のすぐそばにも、巨大風車が立ち並ぶ予定です（上の写真と次頁の風力発電機配置図を参照ください）。

それは、景観だけでなく、今年夏の熱海土石流災害のような、**土石流災害**を招く危険性を孕んでいます（土石流が発生すれば、大量の土砂が、間違いなく、下の奥入瀬溪谷に流れ込みます）。当然ながら、現地では建設計画の見直しを求める運動が始まっていますが、十和田市も発電会社も、建設推進の姿勢を変えておりません。

十和田市にとっては多額の固定資産税収入、地元土建業者には、風車発電機や取り付道路の建設に伴い、建設工事の仕事がまわってくるのではないかと期待（ただし地元業者にどれだけ仕事の発注がくるか、かなりの疑問です）。だがそれは、風力発電所建設によって失うものの大きさと、天秤にかけてはかれるようなものなのか。

行政（十和田市）と風力発電会社に、このまま計画を進めさせるのか、彼らに、いったん立ち止まって考えさせることができるか。十和田湖・奥入瀬の現地はいま大きな分岐点に立っていることを述べて、私の話を終わりたいと思います。

# (仮称) 惣辺奥瀬風力発電所の風力発電機配置と十和田参詣道・遙拝所



※十和田風力開発株式会社「(仮称) 惣辺奥瀬風力発電事業環境影響評価方法書」(令和3年6月)より作成。

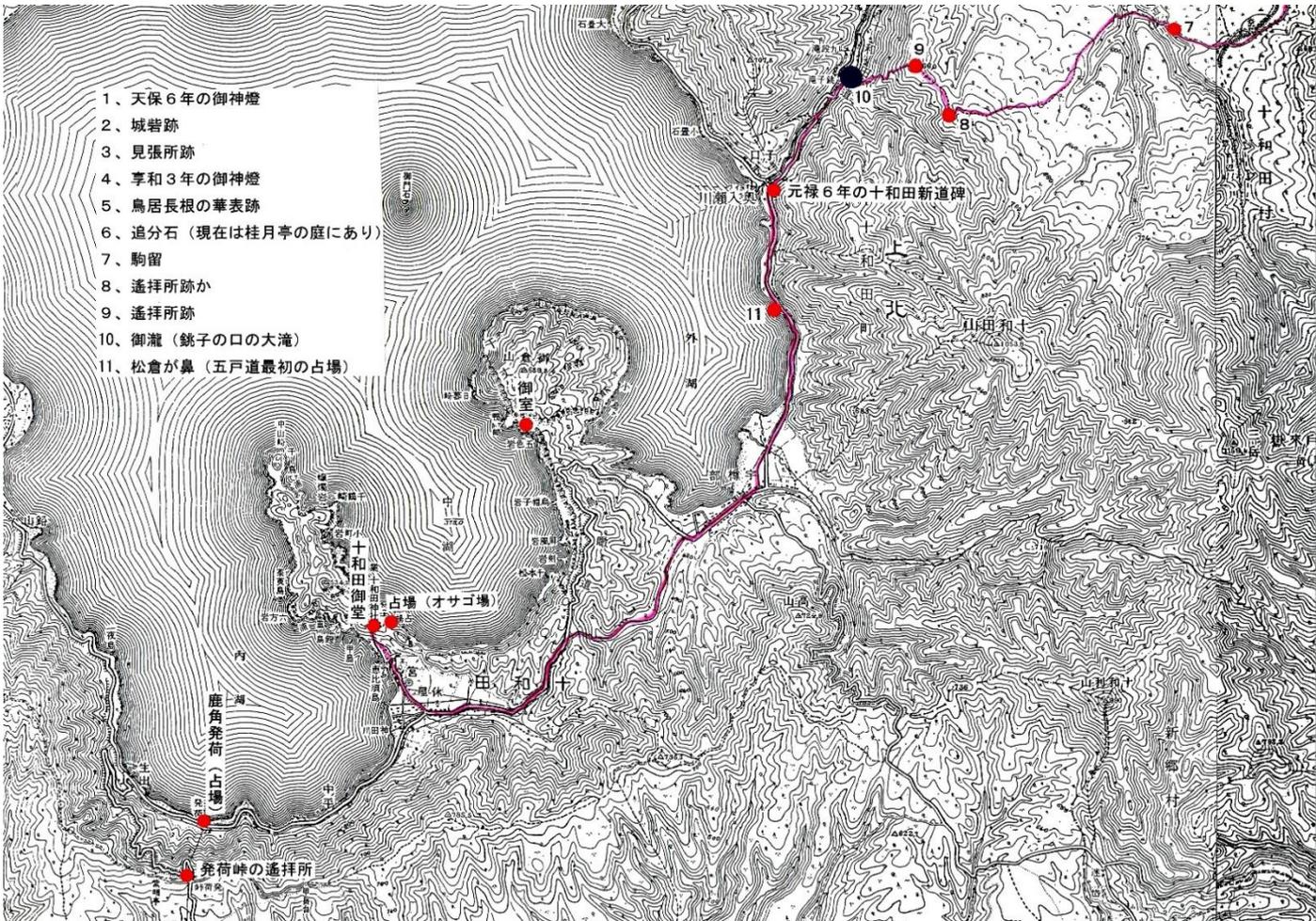
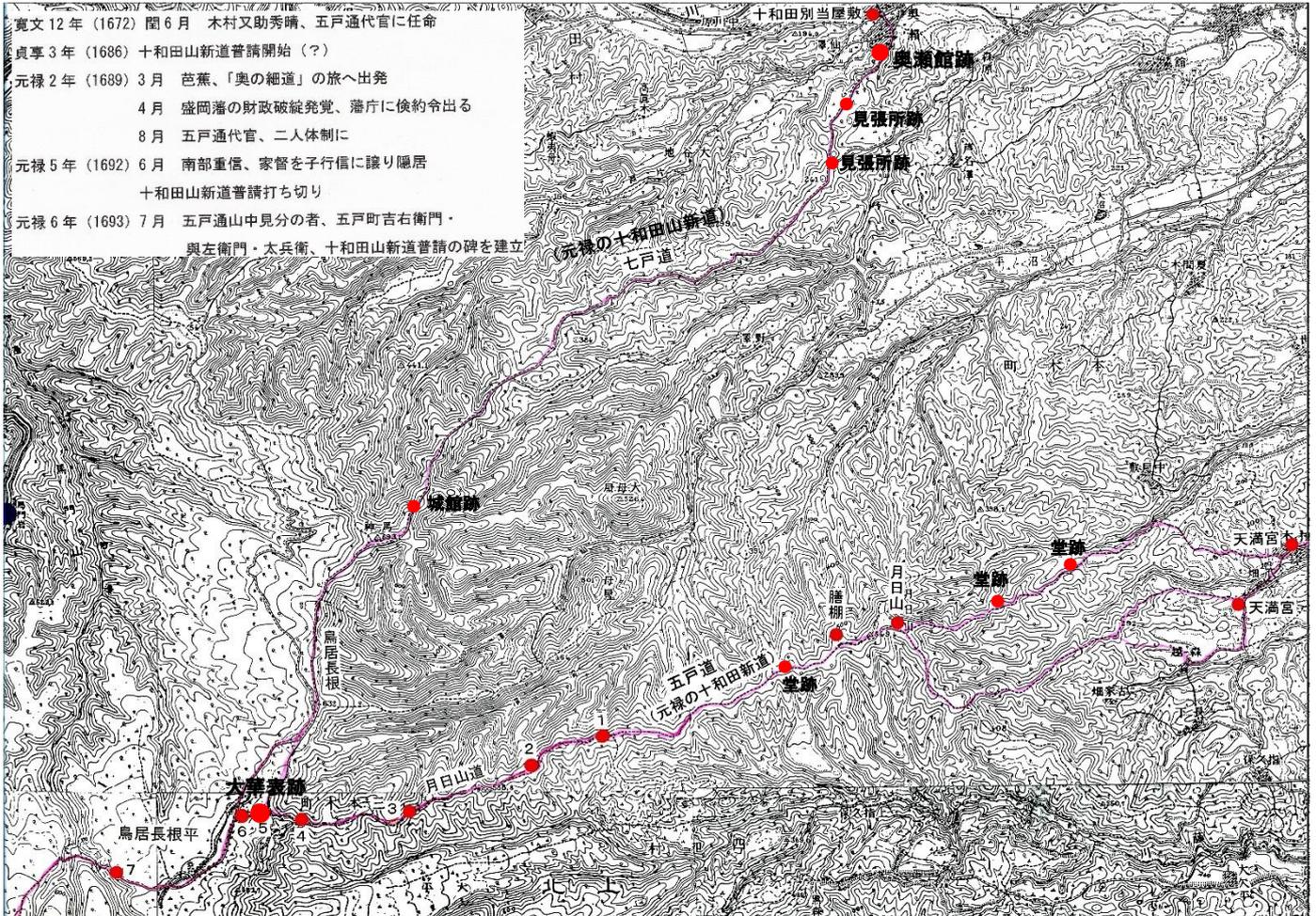
※ベースマップは国土地理院五万分の一地形図「十和田湖」(1996)「八甲田山」(2008)「十和田」(2007)

「田子」(2007)。紫色の線内は事業実施想定区域、桃色の線内が風力発電機の設置予定範囲。

●は風力発電機設置予定地(43箇所)

# 「元禄の十和田山新道」地図

ベースマップは昭和32年国土地理院5万分1地図三本木・八甲田山・十和田湖・田子



- 1、天保6年の御神燈
- 2、城砦跡
- 3、見張所跡
- 4、享和3年の御神燈
- 5、鳥居長根の華表跡
- 6、追分石（現在は桂月亭の庭にあり）
- 7、駒留
- 8、遙拝所跡か
- 9、遙拝所跡
- 10、御瀧（鏡子の口の大滝）
- 11、松倉が鼻（五戸道最初の占場）